

火焰型土器はなぜ雪国で生まれたのか

芸術家・岡本太郎が「なんだ、これは」と驚いたという火焰型土器。新潟県の信濃川流域から多く出土している約5000年前の縄文時代の土器だが、縄目文様はなく、単純に炎を表したデザインでもない。鶏のとさかのような四つの突起、のこぎりの歯のようなフリル、渦巻き文様など、なぜこのような大胆で複雑なデザインが生まれ、広がったのか。見るほどに好奇心をそそられ、これまで多くの人々が魅せられてきた。

この土器14点を含む十日町市の笹山遺跡出土品928点は1999年に国宝となった。今年が国宝指定20周年にあたり、11月9日には同市で記念シンポジウムも開催される。

国宝指定番号1の火焰型土器は高さ46.5センチ、幅43.8センチと大きく、「ナンバーワン」の愛称がある。所蔵する十日町市博物館では他の国宝と随時入れ替え展示しているが、ナンバーワンはちょうどいま展示中。また、市内の他の遺跡の火焰型土器も並べられ、造形を比較できる。土器に関心がある人にとっては見応えたっぷりだ。ただ、同館は耐震性が不十分なため12月2日に閉館し、展示品は来年6月に開館する新館に移される。新館はもちろんだが、この秋、最後となる現在の展示も多くの人にご覧いただきたい。

市内では「美人林」というブナ林が緑から黄色、オレンジ色に変わる。柱状のマグマの固まりで囲まれた溪谷「清津峡」でも岩肌にしがみついた木々が色を変える。同市は世界有数の豪雪地だが、豊かな自然の中に身を置くと、縄文人がなぜここを生きる場所と決めたのか、火焰型土器の発想は何から生まれたのか、想像力をかき立てられる。

新潟日報社ではこの秋、紙面やイベントで同市など魚沼地域3市2町の魅力を発信する「未来のチカラ」プロジェクトを展開する。豊かな恵みをもたらす雪国の自然と、それを生かす人々のチカラを発信したい。火焰型土器はそのシンボルになると考える。

新潟日報社 総合プロデュース室 プロデューサー 中村茂



国宝指定番号1の火焰型土器



火焰型土器を作っていた頃の縄文時代の暮らしぶりを表した展示(十日町市博物館)